
どるちえ★

霽桜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どるちえ★

【Nコード】

N5395X

【作者名】

漣桜音

【あらすじ】

愛猫がある日突如話し出し、自分は2年前に謎の死を遂げた人気アイドルの生まれ変わりだと告げる。
大ファンの彼は、草食系として売り出していたのに、本性はかなり肉食系で、自分の全てを教えようと迫るが……

ぴあにっしも（前書き）

友達のリクで書きました。
私の趣味ではないです。

では、平気な方はお楽しみください（＾ー＾＊）

ぴあにっしも

伊吹翼^{いぶきつばさ}は2年前、18歳で謎の死を遂げた。

彼は国民的人気アイドルグループ・Cat's Eyeのメンバーで、爽やかな外見と性格で、グループ一人気があった。
桜庭蓮^{さくらばれん}も、翼のファンのひとりだった。

だから、半年前から飼いはじめた猫をツバサと名付け、翼として大切に育てていた。

そして、翼の命日である今日、運命の歯車が廻りはじめた…。

「ツバサくん、はい、ご飯の時間だよ」

ツバサの目の前にお気に入りのキャットフードを出した蓮。

いつもなら喜んでキャットフードを頬張るツバサだが、今日は様子がおかしい。

「どうしたの？」

蓮がツバサに近寄ると、驚くべきことが起きた。

「蓮、これから俺が話すこと、信じてくれよ」

「え…、つ、ツバサくん!!?」

ただの猫であるはずのツバサが突如話し出したのだった。

「実は俺、2年前に死んだ伊吹翼の生き返りなんだ」

「え、ええ!!!!!!??」

蓮は驚きを隠せず、大声を出した。

「し、証拠は…:…?」

するとツバサはぴょんと蓮の肩に飛び乗ってキスをした。

と同時にツバサの猫の輪郭が大きく歪み、人間の形になった。

その姿は間違いない、伊吹翼だった。

どうやらキスをすることで、人間の姿になるらしい。

「ほ、ほんとに翼くんだ…:…」

「俺は生前、恋をしてた。それも叶わない恋をね。それが原因で俺

翼は、驚きのあまり抵抗できないでいた蓮の口を自分の唇で塞いだ。
「んっ……」

蓮は反射的に顔を横にむけた。

初めて交わしたキスの相手は、大ファンのアイドル。

嬉しいけど、驚きのほうがそれを上回っている。

「今さら、なんで恥ずかしがるの？」

耳元で囁かれて、ゾクゾクと身体が震え上がる。

「な、何、今さらって……」

「だってさ、今までずっと、一緒に風呂入ってたじゃん」

「あ……／＼／」

蓮は今までずっと、ツバサと入浴していた。

猫なのに水を嫌がらないのが不思議だったが、今、その理由がわかった。

「俺は、蓮の全部を知ってる。だから今度は、俺の全部を蓮に教えたい」

翼は蓮のシャツのボタンに手をかけた。

「ま、待ってよ……」

蓮は翼の手を振りはらった。

「確かに、私は翼くんのファンだよ。だけど、突然そんなこと言われたって、すぐには受け止められないよ……」

「受け止めようとする必要はない。お前はただ、俺に全てを任せていればいい」

すう……と蓮の透き通る髪に指を通し、真上から見つめる翼。

「翼くんて、こんなに積極的な人だったんだね……」

蓮はどことなくガツカリしたような口調で言った。

伊吹翼は爽やか系草食男子というイメージで売り出していた。
なのに、本性は真逆の肉食……。

「別に俺は積極的じゃない。蓮が俺を興奮させてるだけだよ」
「と、とにかく……」

蓮は恥ずかしくなって翼を突き飛ばした。

「もう少し考えさせて……いろいろと……」

振り向くと、翼はつまらなそうな顔をしていた。

「言っとくけど、俺の人間の姿を蓮以外の奴に見られたら、今度こそ本当に死んじまうらしい」

「ふーん、じゃあ誰かに見られちゃえばいいね」

「……つれないなあ。蓮は俺のファンなんじゃないの？」

「そうだよ。ただし草食の翼くんの、だけどね」

いつの間にか、翼の身体は猫になっていた。

「必ず蓮は俺のモノにするから」

ツバサは蓮の脚に擦り寄った。

「できるものなら、ね」

その言葉を聞いて、ツバサはにやっと笑うと、何事もなかったかのようにキャットフードを頬張った。

ぴあの

ある日曜日のこと。

「蓮、ツバサの散歩に行ってきたさい」

蓮の母親が、散歩を急かした。

これはいつものことだ。

「だからね、何回言ったらわかるの。ツバサくんは猫だから散歩なんてしなくてもいいの!!」

「猫は散歩しなくてもいいって誰が決めたのよ!! 屁理屈言ってないでさっさと行きなさい!!!!」

「屁理屈って……」

すると会話を聞き付けたツバサが、蓮の脚に擦り寄ってきた。

まるで、はやく行こうとでも言っているかのよう。

「ほら、ツバサも行きたいって言ってるみたいだし、はやく行きなさい。ついでにお醤油とおみそも買ってきてね」

これが本当の狙いか。

蓮は渋々ツバサを抱き上げて、玄関へと向かった。

靴を履こうと屈んだ途端、ツバサが蓮の腕をすり抜けてキスをした。

「んっ……」

案の定、ツバサは人間の翼となる。

「やった、蓮とデートだあ!!」

蓮の上に乗ったままはしゃぐ翼に、蓮は呆れながら言う。

「ちょっと……お母さんにばれたらどうするの」

「大丈夫、気づいてないから」

蓮の母親は鼻歌混じりに料理をしている。

「でも、人間の姿を私以外の人間に見られたら死ぬんじゃないの?」

「ああ、俺が伊吹翼だってばれなきゃいいの」

本当に都合がいい人だ、と蓮はさらに呆れる。

「あのね……」

蓮は翼を押しのと、スタスタと歩き出した。

「え、ちょっと待ってよっ。抱っこしてくんないの!!?」

「当たり前でしょ。ほら、モサツとしてると置いてくよ」

翼はつまらなそうな顔で蓮の横を歩いた。

蓮は平然と歩いているが、実際はかなり緊張していた。

だって、隣にはあの人気アイドルの伊吹翼がいるのだから。

いくらマスクをさせたとは言え、やはり目元だけでも整った顔立ち
はハッキリとわかる。

しかも強引に手まで繋がれている。

「俺達、カレカノみたいだね♪」

翼はやけに機嫌がいい。

「べ、別に…っ」

あんなに好きだった翼なのに、なぜか強がって何でもないように
振る舞ってしまう。

「ふーん、蓮は俺のこと嫌いなんだ。握手会にまで来てくれたのに。
あの握手会の参加権利取るのって、倍率高いんだよ」

突然口調がきつくなる翼に、蓮も思わず声を張り上げる。

「嫌いなんて言っていないもん!!」

散歩コースの土手に降りた二人だが、辺りに誰もいないため、翼の
言動はますますエスカレートしていく。

「じゃあ、ここでやってもいいの?」

「え、な、何を……?」

突然、意地悪になりはじめた翼の視線が鋭く蓮を刺す。

そして、お構いなしに翼は耳元で言葉を紡ぐ。

「決まってるじゃん。……セックス」

唇が重なったかと思ったら、硬直した唇を押し開いて、舌が滑り込
んでくる。

逃れようとしても離してもらえず、どんどん絡めてくる。

唾液が混じり合い、怪しい糸がひく。

苦しくなってもがいても、翼は唇を離そうとしない。

そして抵抗が弱くなり、深いキスに心地よさまで感じる有様。

翼の右手は蓮の頭をしっかり押さえ、左手はゆっくりと胸を揉みしだいている。

が、そこで蓮はふと我に返る。

「ちよっ……何やってんの……!!」

翼の身体を突き飛ばすと、べとべとになった口を拭った。

「言ったじゃん。セックスって」

悠々と答える翼に、蓮は少し焦る。

「わ、私はね、翼くんのこと、嫌いじゃないけど、好きでもないの」その言葉に対し、翼は目を細めた。

「ふーん」

蓮が自分を好いていようがまいが関係ないというような目つきで、翼は蓮を見つめた。

「確かに、翼くんは好きだよ。でも、それはアイドルとしての翼くんで、プライベートの翼くんとは違うの……」

「俺は俺だけど」

吐息がかかる程、顔を近づけられ、息ができなくなる。

確かに翼はカッコイイ。

でも、積極的すぎる翼はどうもイメージと違っていて、素直に好きにはなれなかった。

「家に帰ったら続きやりたい」

翼は強引に蓮の手をひくが、蓮はそれを振り払った。

「翼くんは私が好きって言うけど、それは本当に私が好きで言うてるの？ただ女の身体を欲してるだけじゃないの……!!?」

「んなわけねーだろ。俺は本当に蓮が好きなんだよ」

「だって一目惚れって言ったって、会ったのはほんの一瞬だし、それに、私のことだってよく知らないでしょ。しかも、翼くんみたいな人気者が私なんかを好くわけないじゃん……!!!騙そうったってそうはいかないから……!!!」

蓮はそのまま土手を駆け上がり、走って行ってしまった。

翼は舌打ちして髪を掻きむしると、猫の姿になって蓮を追いかけた。

——どのくらい走っただろうか。

気がつくと、目的のスーパーまでの道のりから大きく外れ、人気のない薄暗い道に来てしまっていた。

「いつの間にこんなところに…？はやく戻らなきゃ…」

蓮が振り向くと、金髪と茶髪の男二人組が薄く笑って立っていた。

「ねーちゃん、こんなところでひとりでなにやってんの？」

「す、少し道に迷ってしまっ…」

そう言って去ろうとしたが、強い力で腕を掴まれてしまった。

「離して…っ」

すると、金髪が顔を近づけてニヤリと笑った。

「残念でした。俺達といいことするまで帰れないよ」

「い、いいことって何ですか…っ」

今度は茶髪が蓮の背後に回り、耳元で答えた。

「気持ちいいこと」

ゾクリと鳥肌が立つのと同時に、蓮は誰もいない小屋の中に連れ込まれてしまった。

めぞびあの

小屋に押し込まれると強引に倒され、手首を押さえ付けられた。

「いや……離して……っ」

必死にもがくが、何の意味も為さない。

そして乱暴にボタンをはずされ、下着が露になってしまう。

「安心しろ……、綺麗に食ってやるから」

金髪は不気味に笑うと、勢いよく蓮の胸に顔を埋めた。

「きゃっ……やっ、やめて……」

蓮は涙目になって叫ぶ。

「泣いたって、逆効果なんだよ」

茶髪が蓮の口を塞ぎ、口移しで液体を飲ませた。

蓮は飲まないように耐えていたが、茶髪が離してくれないため苦しくなり、とうとう液体を飲んでしまった。

蓮はわかっていた。

これは媚薬だということを。

そして誰も助けに来ず、このまま性奴隷になるか、放置されるだけのだろうと……。

二人は、別に不細工ではない。

どちらかと言えばイケメンなほうだ。

だが、蓮は面食いではないので、今の状態は全く受け入れられるものではなかった。

媚薬を飲ませられた蓮は、次第に身体がほてりだした。

「あっ……い……ハアハア……」

既に唾液に塗れている胸や顔が、やけに気持ち良く感じてくる。

「翼……くん……助けて……」

無意識のうちに呼ぶ、彼の名。

ついさっき、喧嘩をしてしまった彼の名……。

何度も何度も呪文のように。

そうしていれば、虜にならずに済むような気がしたのかもしれない。

一方、翼はその頃、蓮たちがいる小屋をつきとめていた。カーテンの隙間から見える光景を齒を食いしばって見た。

「俺の蓮に手え出してんじゃねーよ……」

彼の口からは殺気に満ちた声が零れる。

なのになぜ、小屋の中に入らないのかという……入れないのだ。

身体が猫だから鍵の閉まっているドアを開けることができないのだ。けれど、このままだと蓮が……という焦りと怒りで全身を震わせながら男たちを睨んだ。

グズグズしている暇はなかった。

「こうなったら」

翼はドアの前に立つと、思い切り叫んだ。

「この中にいる男ども出てこい！！強姦の罪で逮捕する！！！！！！」
もちろんこの声は小屋の中まで響き渡っていた。

「ど、どうするよ……？」

「とりあえずお前、外確認しろ」

金髪がそういうと、茶髪が立ち上がって外を見た。
が、人らしきものは見えない。

油断してドアを開けたその時。

「うああああっ」

茶髪の悲鳴が聞こえた。

そう、翼はこの時を狙って、小屋に飛び込んだのだった。

翼は茶髪の顔面を引っ掻くと、すかさず金髪にも襲いかかった。

「な、なんだこの猫……っ」

金髪の頭をボカボカと殴ると、前に立ちはだかった。

「よくも俺の女に手え出したな……」

猫が突然話し出したのだから、金髪が驚くのも無理はない。
そのまま腰を抜かしてしまった。

翼は蓮にキスをして人間の姿になると、金髪を見下ろした。

「そんなに密室が好きなら、牢屋の中で一生おねんねしてな」

それから起きたことは、ご想像にお任せしたいと思う。

二人組を警察に突き出し、蓮を部屋に連れ帰った翼。

蓮の熱い肌と、はだけた服に興奮していた。

「ちょっとだけ……」

気を失って、ベッドで眠っている蓮の口をそっと塞ぎ、溢れそうだった気持ちを思い切り流し込んだ。

それに気づいた蓮が薄くまぶたを開けると、翼は「あ……」と言って床に正座した。

「さ、さっきは悪かったな……。いきなりあんなことしちまって……」

すると蓮は、淡い笑みを浮かべた。

「私こそ、傷つけるようなこと言ってごめんね。助けてくれてありがとう」

そして翼の頭を撫でた。

「お礼として……私が、あいつらに触られたとこだけだったら……触ってもいいよ……」

蓮は前のボタンをはずすと、ギュッと翼に抱きついた。

「蓮……いいの……?」

押し倒されながら、蓮は少し膨れて言った。

「べ、別に翼くんのことが好きになったわけじゃないからね……。っ。ただ、……葉のせいなだけだからね……」

「そう。じゃあ、蓮が俺のこと好きになってくれるまでがんばるよ」
翼は蓮の胸を優しく揉んだ。

「…あっ……」

翼が揉み吸いを繰り返すと、安心したのか、疲れたのか、蓮は眠ってしまった。

翼は蓮の横に寝そべると、優しく抱きしめた。

「今日は怖い思いさせちゃったな……。目が覚めたら一緒にお風呂な」

額に軽く唇を落として、翼も夢の中へ入っていく。

翌日、頼まれたものを買わなかった蓮が、母親に怒られたのは言うまでもない。

：色々あって大変だったのにね……。

めぞふおるて

「ただいま」

ある日、蓮が家に帰ると、ツバサが怪しげな液体の入った瓶をくわえているのを見つけた。

色は濃いピンク色で、自然のものではないと一目で判断できた。

「翼くん、それ何？」

「これ？近所に住み着いてる野良猫から貰ったんだ。廃墟に忍び込んだときに見つけたらしい」

「は、廃墟……」

「ね、これ飲んだらどーなるかなあ？」

「や、止めときなつて。死ぬかもよ」

ツバサは蓮の言葉もお構いなしに蓋をあけ、匂いを嗅ぐ。

「なんか苺っぽい匂い……」

ツバサが舌で液体を舐め取ろうとしたところを蓮は慌てて止めた。

「だから飲んじゃダメだって!!」

すると、ツバサはニヤリとわらって蓮を見た。

「なんでそんなに必死になるの？やっぱ俺のこと好きなんだ？」

「なんですすぐそうなるかな!!!…だ、だから嫌いではないって…
…。なら飲めばいいでしょ!!」

「ふーん」

ツバサは薄く笑うと一気に液体を飲み干した。

「あ…」

蓮が呆気にとられた次の瞬間、ツバサは人間の姿になった。
が、それはいつもの翼ではなかった。

「え、だ、誰…?」

「誰って、昔の俺だけど。んー、15年くらい前かな」
何故か目の前には5歳の男の子が立っていたのであった。

「て、てか、なんでそんなに冷静なの…?もしかして……」

「うん、この液体の効果、知ってたんだ」

ニコツと笑って、翼は蓮の足元に近づいた。

「ねえ、抱っこ」

あんまり翼が可愛いので、蓮は仕方なく翼を抱き上げた。

近くで見る、幼い翼。

大きな瞳に柔らかそうな頬。

この純粋な顔からどうしてあんな変態になってしまったのか……と蓮は考えた。

しかし、蓮の思考回路は一瞬にして停止してしまった。
なぜなら――

「蓮のおっぱい、いつもよりおっきいっ」

翼が蓮の胸に顔を埋めたからであった。

「やっぱり、まったく純粋じゃないや……」

やれやれと肩を落とすが、満足そうに自分の胸に顔を埋める翼を見ていると、なんだか子供ができたみたいな気分になってきた。
けれど、すぐに我に返る。

「ちよっ……離れてよ……」

しかし、蓮の抵抗に全く動じない翼は、そのままベッドに押し倒した。

身体に感じる体重がいつもより軽い。

「いいよね……?」

いつもより高い声で囁かれたにも関わらず、ゾクゾクと身体が震える。

「…蓮、愛してる……」

小さな口と、小さな舌で、自分の口を塞がれるが、攻め方はいつも
の翼だった。

無意識のうちに舌を絡めてしまう。

小さな手に、慣れた手つきで服を捲りあげられ、露わになった胸が、
快感を欲して疼いているようだった。

（ダメだよ……。感じたら翼くんの思う壺なのに……）

しかし、次々に与えられる刺激に、はしたない声が零れてしまうのが事実だった。

そして、翼は蓮の下着に手を掛けたところで手を止めた。

「やっぱ蓮との初めてをこの姿でやるのは勿体ないな……。俺の身体も成長してないから蓮を楽しませられそうにないし」

蓮はその言葉に、安心した半面、もどかしい思いもどこかにあったことに気づいて、恥ずかしくなった。

それは別に幼い翼だからってわけじゃなくて……。

「あのさ、子供の姿になったのはいいんだけど……」

翼は、蓮の服を戻しながら、無邪気な笑顔を見せた。

蓮はギクツと身体を強張らせた。

「戻り方知らないんだよね。一緒に探してよ」

「やっぱり……」

蓮は、ははは……と力無く笑った。

「だったら何で飲んだのよ……。じゃあ、猫の姿にはなれないの?」

「ちょっと試してみる」

そう言って翼はいつものように猫になろうとした。

「あ、なれた!!」

確かに猫の姿にはなれたようだ。

が、それはいつもよりスリーサイズくらい小さい猫だった。

「か、可愛いっ!!」

それは蓮でさえも思わず抱きつきたくなるくらい可愛いかった。

「く、苦しい……」

始めのうちはもがいていたツバサだったが、しばらくすると、蓮の胸に全身を埋めて顔を緩ませていた。

「やっぱ薬探さないでこのままでもいいよ」

「え、そ、それはいくら蓮の頼みでも……」

「でも、自分で飲んだんだよね?」

「それは、ほんの遊び心ですね……」

困ったツバサは、可愛く鳴いて蓮にすがった。

「可愛くしたってダメ!!」

「じゃ、じゃあさ……ホントはやダけど、もう蓮には手を出さないから……お願い、一緒に探して!!」

小さなフワフワの身体で必死に土下座をするツバサを見て、蓮はなんだかほうっておけなくなった。

「手をださないっていうんなら、探してあげてもいいけど」

「やった!!……でも元に戻っても蓮とやれないのはやだな……」

「グズグズ言わない!!で、どこを探せばいいの?」

「俺の推理だと、この液体があった廃墟に何かあると思うんだ」

「え、廃墟は……」

「へー、探さないって言うんなら、今夜は寝かさないけど」

「はいはい、わかりましたよ!!探せばいいんでしょ、探せば!!」

ふおるて

そんなこんなで廃墟に到着した二人。

錆び付いた門をくぐり、割れた窓から中に侵入する。

「じゃ、俺はあっち探すから、蓮はこっち探して」

「え……、翼くんと離れるの……？やだ……」

蓮が震えながら子猫のツバサを抱きしめると、ツバサは朱くなりながら呟くように言った。

「蓮ったら怖がりすぎ。……まったく仕方ねーな……。じゃあ、一緒にこっちから探すか」

二人（ひとりと一匹）は初めに、『実験室』と書かれた怪しげな部屋を調べた。

何か解くための資料がないかと考えたのだ。

しかし、そこは埃っぽい空間に異臭が漂い、おまけに動物の死骸のようなものが転がり、とても捜査どころではなかった。

次は寝室のような部屋を調べたが、何も得られなかった。

その後も研究室、書斎、キッチン、リビング……と、あらゆる場所を探したが、何も見つからない。

「ねえ、このドアだけ立派じゃない？何でだろ」

ふと声をあげたツバサの見つめる先には、他の木のドアとは比べものにならないくらい派手な、純金が施されたドアがあった。

「確かに妙だね。……ツバサくん、開けてみてよ」

「うん……」

ツバサが恐る恐るドアを開けると――

「え……っ、温泉……!?!」

そこには温泉のような、広くて廃墟とは思えない風呂場があったのだ。

「どうしてお風呂だけ立派なの？」

「あ、あった……!?!?!?!元に戻るための資料……!?!?!」

ツバサは、元に戻るための資料を脱衣所の棚から見つけた。

「よかったね。で、なんて書いてあるの？」

「んーとね…、YUJK-15の解毒方法」

「あの液体、YUJK-15で言うんだ……。なんか本格的だね…」

「YUJK-15とは、幼児化イチゴ風味の意味である」

「……へえ………で？」

「この薬を飲んだ者は、必ずこの屋敷の浴場に、己が好意を抱いている異性と入浴しなければならない、だって」

勝ち誇った顔で言うツバサに、蓮はこめかみをひくつかせる。

「ふざけてないで！！そんなこと書いてるわけ……なくなかった…」

資料を読み、ツバサが読んだ通りのことが書いてあることに肩を落とす蓮。

そんな蓮を見て、ツバサは遠慮気味に言う。

「蓮……、蓮は、俺と風呂に入るの……嫌？」

「え……」

——別に嫌じゃない……。

でも、一緒に入ったら、何されるかわかんないし……。

だけど、このままじゃ、一生元に戻れなくなるかもしれない……。でも……

「翼くんのためなら……私はどうなったっていいよ……」

口が勝手に喋っていた。

だが、それを後から否定する気にはならなかった。

それはきつと本音に近かったから……。

「いいの……？」

こくん、と頷く。

「愛してる」

ツバサは蓮にキスをした。

小さな身体の翼は、資料に書いてある通りに行動した。

浴槽に25度の水をくみ、白い粉を入れる。

相手を脱衣させ、白濁の中に入れる。

「冷たっ……」

25度の水はさすがに冷たくて、蓮は身体を縮めた。

それを覆うように翼が身体を重ねる。

すると、蓮を覆い切れていなかった翼の身体が膨脹し始め、ついに蓮を長い腕で包みこんだ。

資料に書いてある内容は全て終わった。

「……翼くん……寒い……」

「俺も……じゃ、あったまろーか」

蓮は、もうどうなってもいいと思った。

静かに頷くと、しなやかな指で腰のラインをなぞられ、身体がビクンと跳ねた。

深い口づけをされたとき、太ももに熱いものがあたった。

白濁したお湯のせいで見えなかったけれど、間違いなく翼の……。

「……あたってるよ……っ……」

翼は頬を朱く染めながら、でも表情ひとつ変えずに、蓮の胸を揉みながら言った。

「蓮が可愛いすぎるから」

擦りつけられ、蓮はそれが気になって仕方なくなってしまった。

が、それに気をとられているうちに、自分では触れたことのないところに触れられ、思わず声が洩れる。

「そこは……っ」

慌てて翼の手首を掴むと、翼はその手を水から出して、蓮に見せつけた。

「これ、お湯じゃないね」

翼がニヤリと笑う。

「俺、そーゆー蓮も好きだよ」

蓮の身体が熱くなり、さらに奥を攻められると、思ってもないことが言葉になっていた。

「身体が……翼を……欲しがってる……みたい……っ
あっ、と気づいたときにはもう遅かった。

「ふーん。じゃ、どうしてほしいの？」

いつもより攻撃的な翼に恐怖心を抱きながらも、口は勝手に喋る。

「翼のいれて」

（何で何で何で何で！！！！！！??）

全く思ってもいない言葉が次々と口から飛び出す。

翼は満足そうな顔で蓮と繋がった。

蓮は何も考えられなくなっていた。

突き飛ばしたくても、できない。

『嫌』とか『やめて』の一言さえも口にできない。

自分が自分ではないようだった。

口を開けば、強がりばかりで……。

「はぁ……もう、俺、ヤバいみたい……」

「何が、ヤバいの……？」

「……男には、そーゆーときもあんの」

翼の話だと、浴槽に入れた白い粉は、媚薬の効果があるものだと言料に書いてあったらしい。

それよりも、蓮は翼を受け入れてしまったことが、素直に恥ずしかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395x/>

どるちえ★

2011年11月15日06時41分発行